



第3回 サイファイ・フォーラム FPSS

第2回サイファイ・フォーラム FPSS 研究討論会

日時： 2018年6月30日（土） 13:40～16:30

会場： 日仏会館 509会議室



〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿3-9-25

電話：03-5424-1141

会費： 一般 1,000円、学生 無料（飲み物は各自ご持参ください）

会終了後、懇親会を予定しています。
お時間のある方はご参加いただければ幸いです。
ご理解、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

サイファイ・フォーラム FPSS 呼び掛け人
サイファイ研究所 ISHE 代表 矢倉 英隆

第2回 サイファイ・フォーラム FPSS 研究討論会
プログラム

(1) 13:40-13:45 矢倉英隆： イントロダクション

(2) 13:45-14:05 林 洋輔

「ロゴスの戯れ」としての哲学： 遊戯論からの視点

14:05-14:35 ディスカッション

(3) 14:35-14:55 尾内達也

Time being-labor being theory の提案

14:55-15:25 ディスカッション

(4) 15:25-15:45 白石裕隆

「マインドフルネス」等による科学と哲学の融合に向けて

15:45-16:15 ディスカッション

(5) 16:15-16:30 総合討論

(6) 16:45- 懇親会

一題50分： 発表20分 + 討論30分

総合討論 15分

第2回 サイファイ・フォーラム FPSS 研究討論会

要旨

(1) 林 洋輔：「ロゴスの戯れ」としての哲学：遊戯論からの視点

20世紀オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガの著作『ホモ・ルーデンス』において、「遊び」の観点から哲学の実質を論じた議論が知られている。プラトンの対話篇および古代ローマそして中世スコラにて行われた論争に着眼しつつ、「哲学もまた遊びである」と断じた彼の記述は哲学の実質を捉え直す有益な示唆をわれわれに与える。そこで本発表ではホイジンガの議論枠組みを継承する形で以下の二つの着眼に拠りつつ議論が進捗する。すなわち一方で古代より現代に至るまで哲学史とは「論争」の歴史でもあることに着眼し、他方では精緻な論理と修辞表現を駆使しながら「競技」の形式を採りつつ論争の進められたことに着眼する。そして諸論拠をもとに「哲学とはロゴスの戯れである」との回答を提出し、当該命題の是非をめぐる質疑による討究に入りたい。

(2) 尾内達也：Time being-labor being theory の提案

1. 理論の着想まで

Time being-labor being theory (以下、TB-LB theory と表記します) は、時間と空間に関する新しい考え方です。この理論を着想した背景や問題意識をはじめにご説明します。

2. TB-LB theory の3人のキーパーソン

TB-LB theory は、次の3人の考え方をヒントに構築しています。一人は道元、二人目はルカーチ(マルクス)、そして三人目がヴィトゲンシュタインです。この三人の思想をどのように取り入れたのか、ご説明します。

3. TB-LB theory の新しさについて

従来時間論・空間論と比較してどこが新しいのか、また、どこが有効なのか、とりわけ、物理学の時間と空間の考え方と対照してご説明します。

4. TB-LB theory の諸命題の解説

TB-LB theory の中からキーになる命題をいくつか取り上げて解説します。

5. 今後の展開と展望

TB-LB theory はまだ未完で、現在も思索中です。具体的な諸問題に対して、どのように有効性を発揮できるのか、その展望を示します。

(3) 白石裕隆：「マインドフルネス」等による科学と哲学の融合に向けて

自然科学の啓発・教育場面では、科学的素養が不足する受け手に対し、体感機会が乏しいままに、結果としての科学知識の注入に重点が置かれ、科学的発見プロセスの面白さの体験機会が不足していると感じる場面が見受けられる。一方、哲学では、科学知識に基づく思索より、心を扱うにしても文系内容の考察が主体となっており、両者の融合の難しさを感じている。

この点、禅の思想から派生した「マインドフルネス」では、所作（呼吸・歩行瞑想、日常動作等）を通じ、所作や観察対象の“ありのままの”体感と行為者の心の変化の把握を重視する取組が行われており、体感や心の観察を媒介に前述の融合が図られる可能性があると感じている。ついては、発表では、「マインドフルネス」の概要紹介の上、前述の融合に向けた取組として、「マインドフルネス」による、①自然科学単位系・記述（距離・時間・力等）の体感的理解、②グループワークの「場づくり」による科学的内容の直感的理解、③禅語（「不動智」等）による科学的思索の促進等を提案する。この際、NHK 科学番組における「ポピュラー・サイエンス」等や、科学とアートとの融合の取組から得られる知見も援用し、「マインドフルネス」から「マインド・コネクト・フルネス」（科学と哲学の融合も含め、全てのものの繋がりの可能性に心を巡らす境地）に向けた方法論を展開する。